

黒毛和種個別一貫経営の現状と特徴

黒毛和種の繁殖と肥育の両部門を一つの経営体で行う一貫経営では、飼養管理技術や経営管理面で共通する特徴と問題点を有している。一方、繁殖経営から一貫経営に移行する場合の経営収支見通し(試算)では、飼養管理技術が高く施設・飼料基盤が整備された農家であっても、移行後経営が安定するまでに長期を要し、その間の資金繰りと技術向上が重要である。

「生産技術及び経営管理の特徴と問題点」

黒毛和種一貫経営の県内4事例から、その特徴及び問題点を整理すると表1のとおりであり、いずれの調査農家も繁殖牛多頭飼育から一貫経営への移行に当たってクリアすべき条件として、「移行開始時の資金手当て」「肥育技術の確立」「施設投資」の3点をあげている。

表1 一貫経営の技術及び経営管理

特徴	2人以上の労力で作業の分担(繁殖・肥育)・協力。 飼料基盤(草地・水田転作)が多い。 飼養経験が長い。 繁殖飼養管理技術が高い(分娩間隔 12.5ヵ月)。 母牛は平均 8産と多い(償却費が安い)。 肥育技術の習得に2～3年かけている。 畜舎は段階的整備で自力建設が多い(償却費低減)。 経営記帳を実践。 資金力がある(資金繰りに有利)。 地域との結びつきが強い(稲わら交換、共同草地や機械の共同利用など)。
問題点	一経営で両方を行うのは飼料基盤、畜舎、労力及び技術対応で負担大。 子牛生産から肥育牛販売まで長期間を要し、資金の回転が遅い(生産費用の回収に長期を要する)。 生産技術が繁殖と肥育で大きく異なり、良い肥育成績が得られないことがある。

「繁殖経営農家の一貫経営移行に伴う投資と経営収支の見通し(試算)」

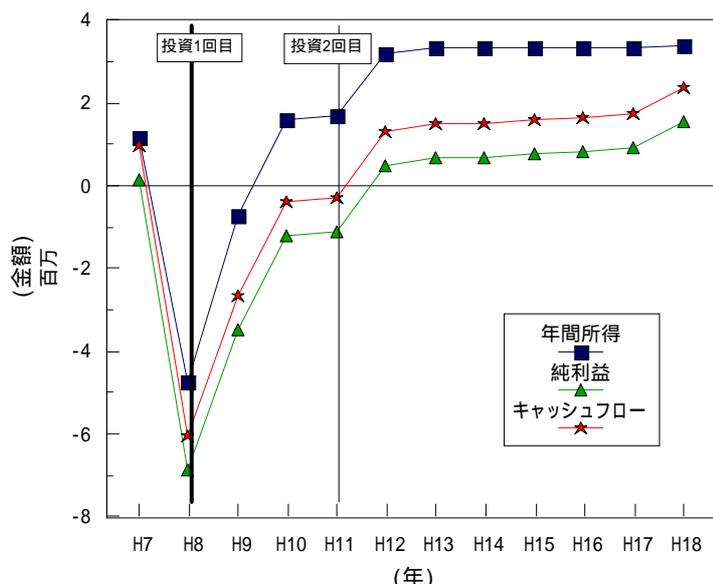


図1 一貫経営移行(繁殖から)の経営収支試算

繁殖牛15頭から自家産子牛主体(肥育牛の66%)で肥育牛30頭規模の一貫経営へ移行するケースについて試算(図1)。

資金繰りは、開始以降4年目までが重要(本試算は2ヵ年で800万円の運転資金を借入れている)で、経営が軌道に乗るまで6～7年を要するが、その後は安定する。所得は開始前の繁殖経営(H7)と比較し、一貫経営安定時(8年後)には2.7倍に増加すると見込まれる。